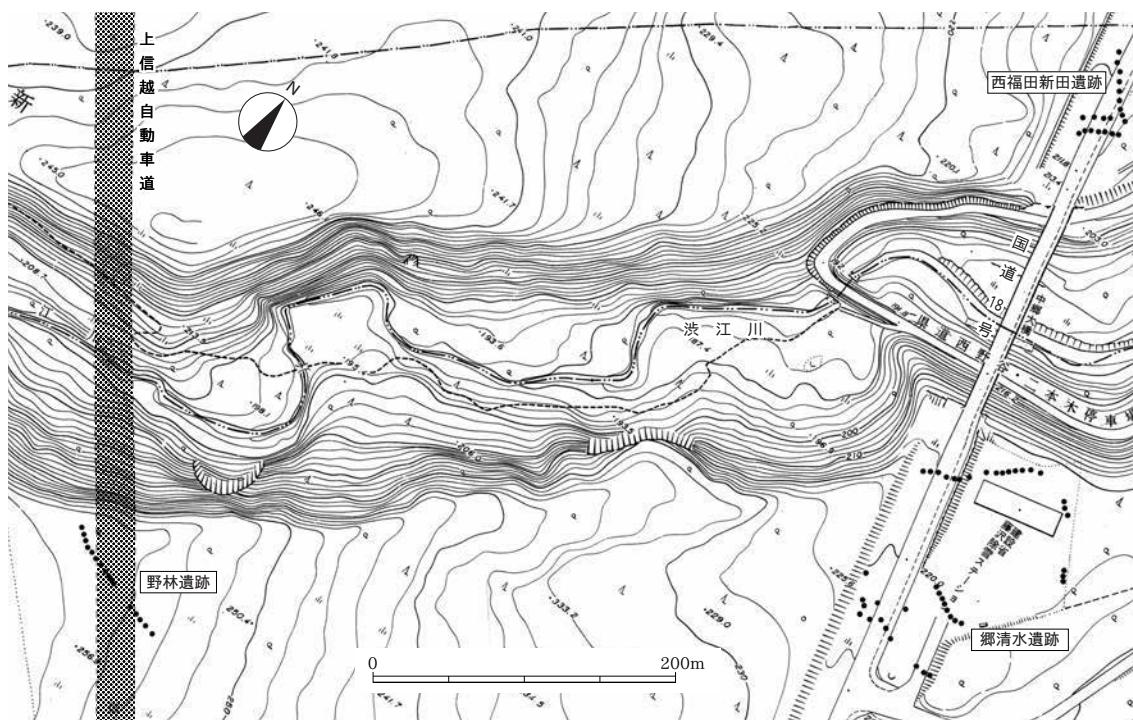


## 第VI章 まとめ

### 1 妙高山麓の陥し穴土坑について

新井市街地より南方の妙高山麓では、国道18号・上信越自動車道に關わる近年の調査で陥し穴土坑の検出例が大幅に増加している。これらを列挙すれば、妙高高原町大堀遺跡13基〔立木・寺崎ほか1996〕・同町中ノ沢遺跡16基〔立木・寺崎ほか1997〕、和泉A遺跡2基〔加藤・荒川1999〕、中郷村小重遺跡24基〔本書〕、同村大重沢B遺跡2基〔(財)新潟県埋文事業団1993〕、同村中の原B・C遺跡9基〔(財)新潟県埋文事業団1993〕、同村野林遺跡16基〔飯坂ほか2000〕、同村郷清水遺跡42基〔立木1999〕、同村西福田新田遺跡20基〔立木1999〕、新井市萩清水遺跡157基〔新井市教委2000・立木1997b〕、同市三本木新田B遺跡1基〔立木1997b〕、同市ハッ塚遺跡1基〔小野・古川ほか1982〕の計303基である。頸城平野周辺を含めれば、上越市下馬場遺跡15基〔小池1998〕、同市黒田古墳群6基〔田海1998〕、同市大塚遺跡8基〔山田1996〕、同市蛇谷遺跡9基〔星1997〕、板倉町峯山B遺跡114基〔秦・岡本ほか1986〕が存在している。

陥し穴土坑の形態については、岩原I遺跡の分類〔佐藤俊1990〕を用いて整理しておく。主体となる形態は、長方形あるいは不整の長楕円形で底面が平坦となるD類型であり、小重遺跡の24基もこの形態である。D類型以外の形態をあげれば、大堀にA類型（円錐台形）13基、野林遺跡にB類型（プラスコ状の円筒形）16基、萩清水遺跡にF類型（溝状）1基とC類型（円筒形）15基前後、下馬場遺跡にC類型5基、大塚遺跡にA類型8基、蛇谷遺跡にF類型9基、峯山B遺跡にF類73基がある。平面が楕円で円錐台形状を呈する中ノ沢の6基（報文ではII類）は、合致する類型を欠くがD類型に近いもの（以下、亜D類型）である。これらのうち、層位的な関係が明らかなものは、田口岩屑なだれ堆積物に覆われた大堀遺



第16図 野林遺跡・郷清水遺跡・西福田新田遺跡の陥し穴土坑配置

〔中郷村役場作成 中郷村6・7 1:2,500〕

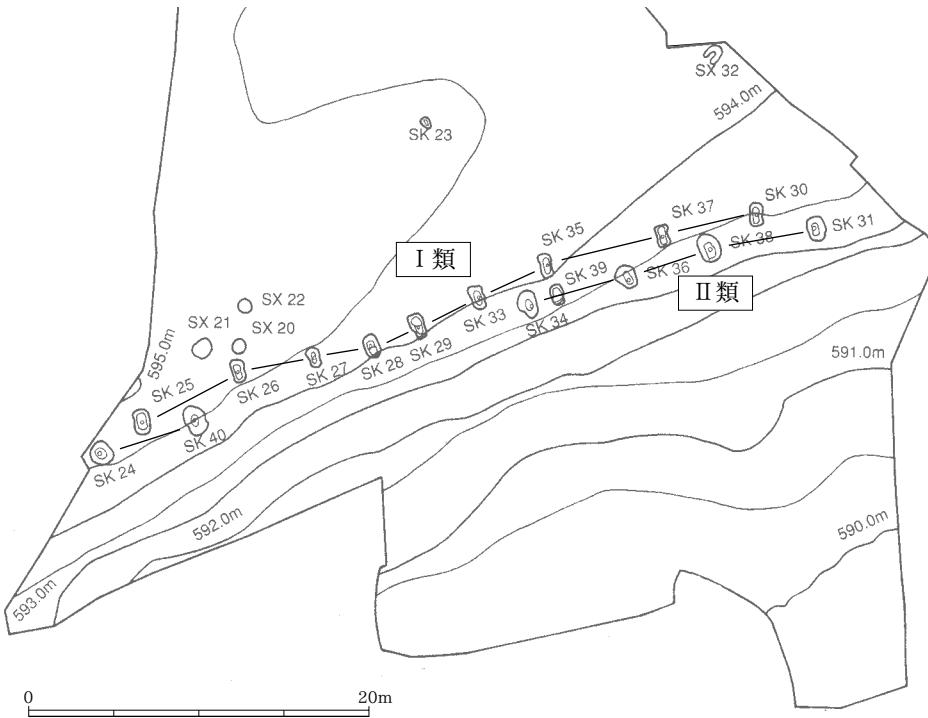
跡のA類13基、赤倉火碎流堆積物より古く田口岩屑なだれ堆積物より新しい中ノ沢遺跡のD類型および亜D類型の16基で<sup>1)</sup>、堆積物との関係からすれば、前者は早期の押型文土器以前、後者は表裏縄文・押型文土器以降、有尾式以前の時期を与えられる。また、峯山B遺跡では、F類1基が前期末葉から中期初頭の豊穴の炉跡の下部に存在していることが明らかである<sup>2)</sup>。小重遺跡の24基については、土坑中の火山灰層が赤倉火碎流と同時期の赤倉火山灰の可能性があると推測するが、分析の機会を逸しており明確にできなかった。これら以外の土坑については、土器が欠落する時期に構築を推測するなど、各遺跡での出土遺物から総合的に時期を推測するほかないが、A類型は早期の遺跡と、D類型は主に前期の遺跡と、F類型は中期の遺跡と関係を見ることができ、頸城平野周辺でも岩原I遺跡における分析と同様に概ねアルファベット順の変遷があるものと考えられる。

妙高山麓では、妙高火山に由来する堆積物が広大な緩斜面を形成しているために地形的な変化に乏しく、土坑の配列と地形について明瞭な関係を見るこはできない。多数が検出されている郷清水遺跡・西福田新田遺跡でも等高線と土坑の配列との関係に一定の規則性は存在しない。ただ、両遺跡には渋江川の崖際に沿って並ぶ列があり（第16図）、中ノ沢遺跡でも土坑が沢の肩に連続して配置されていることを見ると、緩斜面が河川によって断ち切られるその縁辺に偏在する傾向はあろう。小重遺跡も片貝川に面した位置にある（第6図）。

さて、D類型のみで構成される柏崎市呑作G遺跡の陥し穴土坑は、覆土の観察からきわめて具体的な陥穴獣の記述がなされている〔品田1997〕。ここでは、覆土下層部における黒色土層と地山再堆積土層の明瞭な交互堆積を、天井を覆い隠した土砂の崩落が要因であると考え、2つの層1組が陥穴の機能した回数、あるいは天井を覆う仕掛けの数に相当すると推測している。また、互層をなさない上層部の埋土は自然堆積土としている。呑作G遺跡と同様な互層の堆積は岩原I遺跡にも見られることであるが、妙高山麓の遺跡ではないものであり、この現象の差異について若干言及しておきたい。

妙高山麓の遺跡の地山（発掘限界の地層）は、野林遺跡以北の北部地域と上中島遺跡以南の南部地域（位置については第2図参照）に大きく区分できる。北部地域はローム質の粘質土で<sup>3)</sup>、南部地域の地山は関川・田口・矢代川の各岩屑なだれ堆積物である。田口・矢代川の両岩屑なだれ堆積物は、亜角礫を多く混在させている特に堅固なものであるが、大堀遺跡がのる関川岩屑なだれ堆積物の上面は礫の混在が少ないローム質土である。大堀遺跡をのぞく南部地域の遺跡では、土坑内にまとまった地山土は認められず、基本的に黒色土のみが堆積しており、「埋土は基本的に黒色土で、黄褐色等の混入は全くない」という中の原B・C遺跡の例〔（財）新潟県埋文事業団1993〕がその典型である。呑作G遺跡の仮説を適用すれば、これらは天井を覆う仕掛けに掘削土ではなく、敢えて黒色土を用いたということになろう。しかし、陥し穴という罠が度々機能する過程で、土坑の深度が減少し擂鉢化するのをよしとして、構築当初の設計を復元することなく使用を続けるという、呑作G遺跡の推考を敷衍することは困難である。埋土の堆積とともに土坑に与えられる意図が変化する、あるいは深度の減少を予め考慮して土坑が掘削されるということであろうか。

埋土を除去せず継続的に使用する呑作G遺跡の仮説は、土坑下層部土の自然堆積を否定した上に成り立っているが、一定の意図に基づいて設計された構築物が、当初の段階のみその意図に従うというのは難しい解釈である。少なくとも山麓南部では、多大な労働力が投下された土坑を埋没するに任せて利用するということは発想しえず、土坑は利用が継続している期間（断続的なものであろうが）は埋土を除去する等の保守管理がなされ、放棄された時点から埋土の自然堆積が始まるものと考える。また、山麓南部のD



第17図 中ノ沢遺跡の陥し穴土坑

[立木・寺崎ほか1997を一部改変]

類型には、上部と底面に大きな形状差のあるものが存在しないので、呑作G遺跡を含めて形状差があるものは、構造的に弱い長辺側の上縁部が崩壊した可能性が高いと考える。山麓北部の遺跡に地山土の堆積がある程度見られるのは、単に地山土が山麓南部ほど堅固でないことに因るのであろう。呑作G遺跡に見られる上層部「自然堆積」・下層部「人為堆積」の区分については、以上のように疑問を呈しておきたい。

中ノ沢遺跡の土坑群は、上述の保守管理という問題に関係して、興味深い例である。土坑群の形成について報文は、D類型（報文のI類）が構築される時には、以前に掘削された亜D（報文のII類）類型が「手を加えず使用できる状態」にあり（「埋没しきっていなかった」の表現も並存）、両者が補完して等間隔で陥穴が並ぶようにD類型が配置されたと推定している〔立木1997a〕。「手を加えず」の表現は亜D類型を古いと仮定し、それらに掘り返しの痕跡が観察されなかことによるが、両者の新旧関係とタイムラグを認めるとすれば、既存の土坑「跡」をそのまま利用したのではなく、利用するに際して埋土を除去する、形状を一部改変する等の「再生」行為がなされたと解釈することも可能であろう。

## 2 縄文時代前期の集落と土器について

竪穴住居は9基を認識したが、これらに関わる資料はあまりに少ない。出土遺物があるのは、わずかに底面付近の覆土を調査できた2号・4号竪穴のみである。これは赤倉火碎流より上位で掘り込まれたであろう竪穴が判別困難な黒色土層にあったためで、厚い黒色土中に火碎流堆積物や明瞭な火山灰層がない地点では避けられないことである。

環状に配置される8基の竪穴群は、前期後葉土器の分布から見て諸磯b式前後の時期を与えられる。諸磯c式土器は隣接する横引遺跡を含めても出土量は僅かで、また、鍋屋町式土器（あるいは福浦上層式土器）は7号竪穴南方の3・4-K・Lのグリッドのみに偏在しているので、諸磯c式土器・鍋屋町式土器